

---

**無意味なことから始めましょう。**

汰央

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無意味なことから始めましょう。

### 【Nコード】

N3236D

### 【作者名】

汰央

### 【あらすじ】

無意味が嫌いな俺は、恋をすることによって、いつも無意味な時間を送っている気がする。恋人の行動、言動一つで苛ついたりムカついたり嬉しくなったり楽しくなったり喜んだり悲しくなったり悔しくなったり……。それらの感情全部、相手に伝わってなかったら所詮無意味だ。無意味が嫌いな俺。それでもその恋人を手放そうとは思えない俺。まあ、いつかはその感情全部相手に伝わる日がくるかもしれないし。苛々しながら、気長に待つことにしよう。

## 弱気な恋人（前書き）

愛の光なき人生は無意味である。（シラーの言葉）

## 弱気な恋人

側にいてほしいならいてほしいって言えば良い。言えば良いのにアイツは言わない。

ただ寂しそうな顔をするだけ。もしくは笑うだけ。それが俺には物凄く不愉快だったりする。

「・・・なーくん、今日、一緒に・・・帰れたり、する？」

そう控えめに訊いてくるのはやめてほしい、一応付き合ってたんだろ、俺ら。

もしかしてコイツ、俺と付き合ってる自覚がないのか。ちゃんとOKしたよな・・・俺。

「あ、あの、都合悪かったら・・・一人で帰るから・・・、無理しなくて、良い、から」

俺が返事しないでいると不安になったのか、視線を下げ、呟くように言ってきた。

なんでこんなに弱気なんだよ。もし、断ったとしても、駄々こねるぐらいしやがれ。

まじで俺と付き合ってる自覚がないのか？ないのか？無意識にため息がでた。

そのため息にビクリと肩をふるわせたソイツは、俯いてた顔をもっと俯かせてきやがった。

この角度じゃあ表情が伺えない。伺えないけど、泣きそうな顔してるのは気配でわかる。

「別に都合悪いとは言っていないだろうが」

「ごっつ、ごめんなさいっつ」

いや、なぜ。なぜここで謝ってくる。意味分かんねえし。

なんでもかんでも謝れば良いってもんじゃねえだろう、たくつ。その謝り癖、即効なおせ。言葉に出さず、ビクビク震える小動物に愚

痴る。

これで言葉に出してみる、絶対泣くぞ、コイツ。んで引きこもりになる。

もつと強い心を持ちましょう。

「お前部活何時に終わんの？」

「えっ・・・？えっと・・・6時には・・・終わる、と思う・・・」

「はつきり言え」

「ごごごめんなさいっっ」

どもりすぎだろっ、これは。そんなにこわく言っただつもりはない。

「6時か。俺の方は多分7時までやると思うから、一時間くらい待たねえといけないぞ？」

「へ、平気っ！全然待てるっ！！」

「んなら、図書室で待つというて。終わったら行く」

コイツは文化部。俺は運動部。部活動終了時間が大分違ったりする。だからなのか、俺たちが一緒に帰ることは、部活の定休日以外殆どない。

別に部活ある日も一緒に帰って良いんだが（むしろ帰りたいたいんだが）。一時間も待たせるのは気が引けて嫌だった。アイツはアイツで遠慮して俺が誘わなければ一緒に帰ろうとしない。遠慮すんなっての。別に迷惑なんかじゃねえんだから。

「本当に、良い・・・の？一緒に、その、帰ってもらって・・・」

まだ言うか。てか、はつきり言えって言ってるだろうが。学習しねえなコイツ。

「良いって言ってるだろ。迷惑じゃないし、恋人だろ？」

極めて素っ気なく応えたつもりが、何故かソイツは顔をパツと上げ、控えめに俺の瞳を見つめながら「ありがと」そう言っただけで嬉しそうに微笑ってきた。

その微笑みは心なしか、どこか照れてるようでもあった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

不覚にも。

不覚にも、胸が高鳴ってしまったことは、口が裂けても絶対言わない。

・・・そういや、なんでいきなり一緒に帰ろうなんて言ってきたんだ？

内気なコイツが誘ってくるのって、カナリめずらいよな。

・・・別れ話だったりして。

・・・あはは、あり得ねえ・・よな？うん、あり得ねえって。

## レレレの小僧

尊<sup>みこと</sup>、俺の恋人の名前。

茶道部所属の高校二年（同い年）。小柄で華奢、童顔。内気で引つ込み思案、単純、弱気、流され屋、んで自己主張できない性格。えびフライが好きらしい。国語が得意なくせに（関係あるつけ）喋るのが苦手。体力、運動神経皆無。人からよく好かれるから友達は決して少ない方ではない。顔立ちだって其処らの女子より可愛い。正直言って自信持って良いと思う。良いと思うのに持とうとしない。そこがム力つく。カナリム力つく。それからム力つくのがもう一個。俺たち、ちゃんと付き合ってたのに、アイツはまだ片思い気分でいやがる。

ああくそつム力つく、イライラする。恋人同士だろ、俺ら。恋人に遠慮してどうすんだよ。話すときも時々しか目合わせようとしねえし。ああくそつ。

「なる、機嫌良いね。なんかあった？」

「・・・どうみても機嫌悪そうだろうが。目悪いのか、コイツ。眼鏡かけるよ。」

ちなみ『なる』ってのは俺の愛称。本名は成深<sup>なるみ</sup>。尊のみ『なーくん』と呼んでいる。

それから、眼鏡をかける事をお勧めしたい、この青年は同じ剣道部<sup>もといクラスメイト</sup>で同級生の中澤という。カナリお調子者で陽気な奴だ。

「俺は至って機嫌悪そうなんだけどな」

「そうか？物凄く機嫌良さげに見えるぞ。ミコちゃんなんかあつたんだろーん」

『だろーん』って、気色わり。つつか、

「ミコちゃんゆうな」

「レレレのレ〜？ヤあキモおチレ〜すかあ？」

こんのレレレの小僧が。

近くに人がいなかったら、その憎たらしい笑顔に竹刀をおみまいしてやれたのに。

しょうがない、睨むだけで許してやろう。

「そおんな恐い顔しなさんな。機嫌良さげだったのは本当なんだから」

だからどこら辺が、だよ。

「尊となんかあったんだろ？もう隠してないで言いなさいよあ」

キモい・・・、カナリキモい・・・。うわっ寒気つつ。なんでコイツ捕まらないんだ？

謎だ。女子が便所に行く時「誰か一緒に行こう」と誘う行動の次に謎だ。あああれも謎すぎる謎だ。なんで誘う？一人で行けよ。お前はガキか。そんでもって「良いよ」って返事する女子も変だ。謎だ。頭がおかしいんじゃないかと思う。ここは男子校だからそーゆーことはもうないんだが、中学生の時は本気で意味が分からなかった。ぶっちゃけ、3が『人並みにおこれや』になることに対しても理解ができなかった。謎だ。なぜそこで命令形？なぜ命令形になる？昔ある友人にそう問うたことがあったが、「なるもんはなるんだよ」で納得させられた。だからなんでなるんだよ・・・。ダメだ、この世は謎が多すぎる。

てか、こんな話しても無意味だ。無意味は嫌いだ。だから話をもどそう。

「尊ゆうな」

「ならなんて呼んだら良いんレえ〜すかあ？」

こんのレレレの小僧が。

「苗字があんだろっ」

「忘れちった」

・・・、やめよう。ツツコムのはやめよう。無意味だ。無意味すぎるほど無意味だ。



一度ツツコンでしまったら、『俺の父ちゃんパイロット』以上に無意味な言い争いになる。

「・・・俺が機嫌良さげに見えた理由は？」

「だってえ稽古中にい鼻の下あ伸ばしてたしいっ」

「・・・ああそうか、お前死にたかったのか。そうかそうか。今まで気付かなくて悪かったなあ。でも大丈夫、今すぐ殺してやるから秒殺してやるから。」

「やだなあゝ。なんでそんなにキレてんだよ。冗談じゃないかあゝ。もう、殺気まで漂わせちゃってナル君たらっ。冗談通じない人って嫌あい」

「因みに俺は冗談言う人間が嫌いだ、待て動くな。動くと楽に死ねねえぞ。安心しろ、俺は優しいから一瞬で死なせてやる。」

「どこにも安心要素ないんだけどなあ。嘘だって、かんだよ。か・ん。今日はなんか、空気みたいに軽い動きしてたからさ。なる、機嫌良いなあって思っただけ。もしかしてミコちゃんにデートにでも誘われた？」

「デートに誘われた日にゃあ絶対調すぎてお前の首折ってるよ」

「うっわあ、なにその爽やか笑顔お。しかもゆってる事力ナリ恐いしい」

「ま、デートじゃないがソレに近いな」

「おっ、まちで？なに、なに？この中澤君に話してごらんなせい」  
「誰がレレレの小僧に話すかよ」

「おいっ、そこ！サボってないで稽古しろっ！」

俺と中澤の手が止まってることを主将に気付かれ、すかさず注意された。

俺は慌てて稽古を再開させる。

「やあい怒られたあゝ」

小声で言ってきた中澤に

「てめえもだろっが」と怒鳴りたい衝動を抑え、代わりに、とびっ

きりそりやあもつとびつきりの笑顔をソイツにおみまいしてやった。  
すると中澤は本気で怯えた顔になって、その顔を見れた俺はたぶん、  
勝者だと思う。

無駄の無い生活をおくろう

尊と知り合ったのは一年前。5月のある休み時間、幼馴染みの目暮めくれ（愛称はめぐ）が突然俺のクラスに尊を連れてやってきたのが始まりだった。

「この子、僕のクラスメイト、んで同じ部活の子。尊ってゆうんだ。仲良くしてやってね」

久々現れて自分の友人を紹介したかと思えば仲良くしてやれ．．．  
？どういふことだ。

俺は不審げにめくを見上げた。あ、ここで勘違いしてもらっちゃ困る。

めぐは尊とおんなじくらい小柄でちっちゃい。逆に俺は平均よりも身長高め。なんで見上げたってゆう表現になったかつつと、単純に俺が椅子に座ってるから。

椅子に座ってりゃあめぐたちのほうが目線高くなるわな。だから見上げたで正解。

「あ、んでこの目つき悪くて態度デカそうなのが成深くん」

今度は尊に俺のことを紹介し始めた。目つきも態度も余計だ。

めぐの背中に隠れるように佇んでいる尊を見ると戸惑っている様子だった。

けどそれはあくまで様子。俯き気味の顔から表情を伺うのはカナリ難しい。

「ほら、ミコ。挨拶するつ。挨拶は大事だよ？」

お母さんかよ。って、めぐは男だからこの場合お父さんが正しいか。

「え、えつと……。こんにち、わ……。？」

なんで「？」がついたんだ。もしや帰国子女？日本語不得意？

「  
・  
・  
・  
ちわっす」

頭ん中で疑問符が飛び交ってる俺とは正反対にめくは満足げに微笑

んでいる。

・・・なんなんだよ、おい。

めぐから視線を外して、後ろにいる尊へ視線を移す。

目があった。

目が合った。目が合った。バッチリ目が合った。

表情や声には出なかったものの内心力ナリ驚いていたりする。俯いててよく見えなかった顔がバッチシ見えた。

バッチシ見えた尊の顔、

本当に同じ年か？と疑いたくなるようなベビーフェイス。

本当に男なのか？と問いたくなるような丸くて大きい瞳、ピンクの頬に形の良い小さな唇。

ずーと俯いてたから気付かなかった。しかも前髪長いし。

初めてこんな可愛い顔立ちした奴見た気がする。

俺は何故か感心してしまい、無意識に尊をまじまじと観察してしまっていた。

観察される尊のほうは恥ずかしらしく（そりやそうだ）俺の視線から逃れるべくまた俯いてしまった。

折角可愛い顔してんだから顔上げりゃあ良いのに、勿体ないな。

「・・・ところでめぐ。そろそろチャイム鳴るけど教室戻らなくて良いのか？」

「・・・うあつ、まじだ。ミコ行こう」

「あ、うん・・・」

慌てて踵を返し帰っていくめぐとめぐの後を追う尊、そんな二人をぼんやりと眺める俺。

教室をでる際、ふいに尊が俺の方をチラッと振り返ってきた。再び目が合う。

合ってすぐ、尊は頬を紅く染めた。

なんだ？もしか風邪か？

「……お大事に」

「……え？」

「ミコツ、早くしないとチャイム鳴るっ！」

尊は首を傾げたあと、何か言おうとしていたが、めぐに急かされ結局何も言わず出て行った。

「……」

そういや、結局めぐは何がしたくて尊を俺に紹介したんだ？

自慢ってわけじゃあねえよなあ、あれは。んん……。……

「……やめた」

答えのない疑問にいくら悩んだって、それは無意味だ。

無意味なことはしない。無意味は無駄。無駄は無意味。

てゆうか、そもそも疑問に答えとゆうものがあるのだろうか……。めぐたちが出ていった扉から視線を外し、顔を前に向ける。

前に向けるとすぐ黒板が目についた。

深緑色の黒板には白チョークで『無駄の無い生活をおくろっ』と大きく書いてあった。

まったく、その通りだ。

俺は苦笑いし、鳴り響くチャイムに耳を傾けた。

別に一目惚れだったわけじゃない。

その時の俺は『可愛い顔した奴だったなあ』ぐらいにしか思っていなかったし、名前だって放課後になればすっかり忘れてた。

それに男相手に一目惚れつつうのがそもそも変だ。変とゆうか可笑しい。つつか無理。

それこそ、同性に恋愛感情抱くのだって可笑しいし、あり得ない。難しいじゃなくてあり得ない。

……そうあり得ない。

あり得ないんだ。

あり得ないはずだ。

いや、はずだった。

はずだったんだ。

はずだったんだけど、けど。

奇しくも、

俺が尊に恋愛感情を抱いてしまうようになるのは、そう先の話でもなかったり、

する。

## 敵はスイートポテト

腕時計で時間を確かめ、俺はため息を吐いた。

時計の針は7時45分をさしている。

7時には間に合うと思ってたんだけどな……。これは大遅刻だ。いや、実を言うと、7時ちょっと前には部活は終わっていたんだ。終わっていたんだけど、色々あって……。

その色々つつうのが戸締まり当番にあたっていた事だったり、調理部が手作りスイートポテトをお裾分けしに来た事だったり。

……ちきしょお、なんで俺スイートポテト好きなんだよつ。余ったスイートポテトをかけたジャンケンにまで参加してしまったではないかっつ。ああくそつ。

んでもあのスイートポテトは美味しかった……。。

ジャンケン、あの時チヨキださなかったらもう一個食べたのに……。なんでチヨキだしたんだ、なんでチヨキだしたんだよ俺つ。んでもってどうして中澤はグーだったんだ。ジャンケンで勝った時のアイツのあんのニタニタ笑顔、すっげえムカつく。しかも野郎わざわざ俺の目の前で食いやがって。やっぱあん時竹刀で一発おみまいしてやれば良かった……。。

でもまあそのスイートポテトのせいで俺は尊を二時間近く待たせちゃったことになるからな……。この機会にスイートポテト嫌いになるか……。いや無理だな。スイートポテトは無理だ。嫌いにはなれない。

因みに、決して俺は尊との約束を忘れてたわけじゃない。スイートポテトだって惜しい気

したが一口で頂かせてもらった。ジャンケンだって五分くらいで終わっていたし。

スイートポテトだけだったら俺は尊に二時間待たせずにすんだんだ。問題はスイートポテトじゃない。戸締まり当番だ。

当たり前の事だとは思うが、戸締まり当番は部員全員が帰るまで帰れない。普段はすぐ帰宅する良い子の剣道部員は、調理部がお裾分けに来た日は殆どの部員が遅くまで残る。

これは剣道部に限ったことじゃない。他の部活もそうだ。

それというのも、そのお裾分けにやってくる調理部の中に、学園一可愛いと人気な二年がいるからだ。名前は・・・ゆ、ゆ・・・ユキシロ？うん、確か雪城。下の名前は知らないし、興味もない。あ、断っておくがここは男子校。雪城はれっきとした男だ。

尊みtainな童顔とちがって少女みtainな容姿をした小柄な雪城は性格も明るくさっぱりしていて、学年問わず人気がありモテたりもしている。

男と付き合ってる俺が言えた事じゃねえが、・・・この学校はアレかホモが多いのか。それとも女に飢えてるとか？

つとつと、話を戻そう。

その人気な雪城が来るとみんな競って雪城に話し掛ける。んでそのまま話し込む。

雪城ファンの部員が部室で雪城と話し込むイコール戸締まり当番の俺はそれが終わるまで

帰れない。

図書室に行けない。おーのー・・・。

結局アイツら、30分も話し込みやがって。全く・・・傍迷惑な奴らだ。

って、そうこうしている間に8時になるっ！ああくそっ。

無意味が嫌いゆうわりに、俺が一番無意味な時間をおくっているのではないか？

俺は八つ当たりしたい気分を抑え、静かに図書室の扉をあけた。



## ポリグロット（前書き）

### 【ポリグロット】

多言語に通じている人。多言語使用者。多言語話者。

## ポリグロット

「失礼しまーす、．．．尊？」

「あ、成深くん」

図書室の中に入っただけで、声を掛けてきたのは尊じゃなくて図書室の先生だった。

「良かったあ、そろそろ閉めようと思ってたから」

「まじっすか？」

「まじまじ。ぎりぎりセーフ、だよ」

「良かった」

安堵の息を吐いて辺りを見渡す、尊の姿が見えない。

「ああ、尊くんね。尊くんは其処の本棚の後ろにいますよ」

其処、といって先生が指差した本棚。その本棚に向かって足を進める。

「尊」

本棚の後ろ。其処には丸い机と3つの椅子があった。

その1つの椅子に尊が座っている。．．．机に突っ伏しながら。

「尊．．．？」

近づいて尊の顔を覗くとそこには、

「．．．．．っんにゃ．．．」

寝顔があった。

『んにゃ』って．．．お前は猫か。しかも本を枕にしてるし。ヨダ

レたらしてねえだろうな。

「みこ、尊っ！おい、こらっ。起きろ！」

「．．．．．あと、5分」

「．．．．．」

バシンッ、

「いったあーっ！っ！」

「そんな強く叩いてない。．．．おはよ」

「……あ、おはよ」

寝起きというのもあつて頬が紅く、瞳も少し潤んでいる。

その潤んだ瞳が俺を見上げてきた。しかも上目で。ちよつとヤバいぞ、腰にキた。

「つて、もう8時っ!? ごごごめんっつ! 寝っちゃってたっ、ぼくそのっ」

「落ち着け落ち着け。俺も色々あつて今来たところだ。むしろ謝らねえといけないの、俺のほうだし」

「いいいやっ誘ったの、僕、だし! なーくん全然、悪くないっ」

「……尊、とりあえず落ち着け、な?」

「ごごごめんなさいっ」

いやいやいや。なぜ、そこで謝るんだ……。しかももりすぎ。

これは違う話題を出した方が良いかな。ふいに目に入った尊が枕代わりにしていた本。

ヨダレはたれてないようだ。……つて、ええ!?

「……尊、その本」

「え……? これ、がどうか、した?」

「英語……?」

尊が枕代わりをしていた本は、横書きで、しかも全部ローマ字で書いてあつた。

もしや本気で枕代わりしてた、とか……?

「ううん、フランス語……だよ」

「フ、フランスウ? あれか、ちやおかつ?」

「それは、イタリア……かな。……フランス、は『<sup>ボンジュ</sup>Bonjour」

「えっ、ほん? じゃなくて、いや、いやいや、んなこと訊いてねえし、つか発音良いなあお前っ! え、読めんの? お前フランス語読めんの?」

「い、一応……因みに、英語とイタリア語とドイツ語も……読める、し……話せる」

「ほ、本当ですかっ!？」

驚愕な事実を聞いて、つい敬語になってしまった。

そのことに自分自身も驚いたし、尊もカナリ驚いたようだ。

てか、コイツが文系得意なのは知ってたけど、こんなに外国語が強い奴だったとは知らなかった……。人は見掛けによらず、つてのは本当なんだな。いやはや。

「おい、お二人さん。そろそろ俺も帰りたいのですが」

「えっ、あ、すみません。すぐ帰りますっ。ほら、みこ帰んぞ」

「あ、はいっ」

いきなり急かされた尊は、慌てフランス語の本を鞆にしまい椅子から立ち上がった。尊が立ってから俺は出入り口の方へ足を動かす。

「失礼しました」

「ん。尊くん、成深くん、気をつけて帰りなよ？」

「あ、はい。・・・さよう、なら」

「ん、ばあいばい」

手をふる先生に一礼してから俺たちは図書室をでた。

図書室をでるとすぐ窓が目についた。夏が近いからと言ってもさすがに8時。外はカナリ暗い。

「まっくら・・・だね」

「だな。悪いな、二時間近く待たしちまって」

「ぼく、寝てたし。お互い様、だよ」

「んでもなあ。っと、そろそろまじで校門閉められるな。少し早足で行くぞ」

尊が小さく頷くのを確認してから、俺は腕時計を見た。

あと3分で8時になる。

## 偉大なる翻訳家

「ところでさ」

「………?」

「なんでお前、そんなに外国語強いの?」

「帰り道、気になっていた事を聞いてみた。」

「………えっと、………」

「まさかお前、帰国子女?」

「ちっ違くて、……お母さんがね、……その、……ポリグロツト、で」

「は?ぼりるぼつと?」

「ポリ、グツ、ロツト。えっと、……多言語話者ってゆったら、分かる、かな?」

「沢山外国語話せる人つつうことだよな?」

「うん、そう。……小さい頃から、お母さんに教えてもらって、……それで外国語に、ちよつと……強い」

「ちよつとどころじゃねえだろーがよ」

「う、ううん、ちよつと……だよ。お母さんなんか……殆んどの外国語、マスターしてる、し」

「尊の母さんって、すげえのな」

「翻訳家……だから」

「翻訳家だったんだ、お前の母さん」

「つか翻訳家ってそんなに多国語覚ええないといけねえのか?」

「よっぽど根気強い奴じゃないとできねえよな。尊の母さん偉大だわ。……あの」

「んあ?」

「あ、いや、なんでも、ない」

「いいかけて止める。尊がよくすることだ。俺は眉を寄せながら尊を見下ろした。」

「言いかけて止めんなよ」

「う、ごめん」

声のトーンが心なし低かったせいか、尊は肩をビクツとふるわせ身を縮めた。

それを見て小さく舌打ち。なんでコイツこんなにビビるんだよ。

恋人云々以前に、尊は本当に俺のこと好きなのか？

なんで好きな奴相手にここまで怯える？

なんで顔を上げようとしなない？

ああやばい。苛々してきた。さっき糖分とったばかりなのにな。気付けばため息が出ていた。

「・・・つごめんなさい」

「だから、なんですすぐ『ごめんなさい』がでてくるんだよ？別にお前、悪いことしてねえし」

「で、でも・・・なーくん、ぼくのせいで、苛々してる」

「お前がそうやって悪くもねえのに謝ってくるからだろ？」

「ごごごめつ・・・あ、」

「はああああ・・・」

これほど深いため息出したのも久々な気がする。

何故か自分に呆れていると、尊は今にも泣きそうな顔をしてきた。

たく、頼むからそんな顔すんなよ・・・。俺、お前の泣き顔、すっげえ苦手なんだから。

ため息を吐いた。無意識だった。

「俺さ、遠慮とかしてほしくないだよ。お前には」

「・・・え？」

「それから、謝ってもほしくないし」

「・・・あ、う」

「俺も、そりゃあ・・・悪いところあるかしんねえけどさ、けど俺は・・・」

「ち、ち違うつー！なーくん、はなにも悪くないっつー！」

「・・・」

驚いた。驚いて言いかけていた言葉を忘れてしまった。

あれ、俺、何言おうとした？ いやまあそれは、今は置いてこう。それよりも尊だ。尊。

尊はいつも下げてる顔を上げ、目を大きく開き、俺を見上げてきた。少し息が乱れてる。そりゃそうか。あんなにデカい声だったもんな、コイツ。

普段小さい声で話すコイツが、暗い夜道に響き渡るほど、デカい声をだした。

俺は驚きのあまり、ただ、尊の大きく見開かれた瞳を見つめ返すことしかできなかった。

胸がドクンドクン鳴っている。尊はまだ、俺の瞳を見つめている。初めてだ。

こんなに長く見つめ合っているのなんて。いつもはすぐ尊の方が目を逸らすのにな。

・・・俺は何か、まずいことでも言っただろうか。  
沈黙が続いた。

その沈黙を先に破ったのは意外にも、尊だった。

「・・・ぼく、ちゃんとする、から。嫌いに、ならない・・・でやばい。コイツの言葉の意味が全く理解できてねえ。」

てゆうか、なんでいきなり『嫌いにならないで』なんだっ？

「嫌いつて、なんでいきなり」

「ぼく、喋るの苦手、だし・・・拳動不審、だし・・・すぐ・・・謝っちゃう、し・・・目見て、話そうと、しないし・・・」

「どれもごもつともだけど・・・お前それ以上興奮して話すと酸欠になんぞ？」

「明るく、ないし・・・目立たないし・・・取り柄ない、し・・・」

「いや、外国語喋れんじゃん。それはすげえ取り柄だと思う。自信を持って、自信を」

「か、可愛く・・・ないし」

人の話聞け・・・。それでもって鏡を見る・・・。すっげえ可愛い子が映るはずだから。

「不器用、だし・・・なーくに迷惑、掛けっぱなし、だし・・・それに・・・それに」

まだあんのかつ。まじで酸欠になるってっ。

「おい、みこ。そろそろ・・・」

「それにつ、雪城くん・・・じゃない、し」

あ、尊の眉が八の字になった。つか、まじで泣きそうなんだけど。そのまま顔下げんなよ、絶対涙零れっから。

・・・つつつか、

「なぜに雪城？てか雪城って調理部の雪城？」

尊はゆっくり頷いた。

息がかなり上がってる。顔も耳まで真っ赤。初めて見たぞ、こんな尊。

・・・まさかこんなところで倒れたりなんか、しない・・・よな？

「雪城がどうかした？」

「可愛い、から」

「理由になってない」

「ごめんっ。あ、ごめん」

「あー・・・もう良い。謝んの禁止。とりあえず、なんで雪城の話しになったか言ってみ？」

「・・・・・・あう」

「目逸らしたって無駄だぞ。さっさと言え」

少し強い口調で言ってる、尊は益々泣きそうな顔になって俺を見つめてきた。

ああやつぱし可愛い、と思ってしまっなのは愛ゆえで。

それでも表情は変えず尊を見つめていた。

口をモゴモゴしていた尊だったが、暫くして、ようやく観念したのか「あの、ね」と控えめに話し始めた。その声はいつものよりも小



さく、俺は耳に神経を集中させることになった。

## Is it Japanese?

「あの、ね」

「うん」

「雪城くん、ね」

「うんうん」

「好きな人が、いて、ね」

「うんうんうん」

「・・・いて、・・・が、・・・で」

「んん？」

「なーくん、で」

「・・・好きな人がいて・・・が・・・で、なーくん  
で・・・」

えっ。これ日本語？日本語？え、日本語？じゃばにーず？いずいつ  
つじゃばにーず？

顔紅くして必死にしゃべってる奴にこんなこと言いたかねえが、  
・・・なに言ってるのか全つつつつ然分かんねえ。

外国語の前に日本語を勉強しろ。母国語だろ。

「俺がなんだって？」

「・・・なーくん、なの」

「だからなにが？」

やば、だんだん苛々してきた。広い心を持たなければ。

「なーくんが、好きなの」

「尊が？」

「・・・う、違・・・う」

なぜ泣くつつつ。

てか、違うの・・・っ！？違ったのっ！？

え、尊、え、まさかまじで別れ話っすか！？まじでじまつ！！！？

うつわあ、今すげえ頭混乱しとるっ。それでも表情にださないとこ  
ろ、俺は凄いつつ。

「ち、違うのか？」

「うんっ」

その力強い頷きで、俺はカナリ凹んだぞ。

「俺のこと、好きじゃない、のか？」

やばい・・・泣きそうだ。

泣くな俺。男だろ。しかも攻めだろ。泣いたら終わりだ。泣いたら  
終わりだっ。

頑張れ、耐えるんだっ。

「へ？」

そんな俺の心情を知るわけもない尊は、さっきまでの泣き顔と違う、  
きよとんとした、本当に『きよとん』と効果音がでそうな、きよと  
んとした顔を俺に向けてきた。

「いや、違うつつつたから」

「へ？・・・あつ、違う。そうゆう、意味じゃ・・・なくて・・・」

泣き顔、きよとん顔、次は焦った顔。意外に百面相だったんだな。

「ぼくっ、好き、だから・・・なーくんの、こと」

「・・・」

・・・好きな奴から、好きって言われると、物凄く嬉しいのな。  
今、すっげえ実感してるよ、俺。

とりあえず、俺の勘違いだったんだよな？ああ、勘違いで良かった。  
「それ、で・・・雪城くんも、なーくんのこと、好き・・・なんだっ  
て」

「へえ」

そうか、雪城が。

「・・・」

「・・・な、なーくん？」

そうか、雪城が。

「・・・」

雪城が・・・？

「雪城が？俺のこと？」  
「なんだそれ。」

これでも相思相愛です（前書き）

愛することはほとんど信じていることである。（ユゴーの言葉）

それでも相思相愛です

どうやら、尊の話からすると、俺は雪城に惚れてるらしい。

[illegible]

なんでつつつつ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？

だってあの雪城がだぞ？あの人気者の雪城が、だぞ？調理部のあの雪城が、だぞ？

なんだそれ。　　なんだよそれ。

はっ、

「笑えねえ冗談ゆうなつて」

「ほ、本当……だもん」

「いや、だって・・・さ。調理部の雪城だろ？人気者だろ？・・・あり得ねえって」

「だ、だって！相談、されたっ！！」

「お前に？」

「ぼく、に……じゃなくて、……めぐくに、雪城くんが」

「ああ、アイツか」

因みに、めぐは俺たちの関係を知ってる。

なんで知っているのか？それは追々話すから今はスルーしてほしい。

「それで、めぐくん、から・雪城くん・な・くんのこと、相談されたって、訊いて」

「……もう一度訊くが、それ冗談じゃないんだよね？」

「うん」

まじかよ……。なんかしたっけ……。俺。

「ちゅ、中学生の時、から、好きだった……らしい、よ?」

「中学生……？って、俺アイツと同じ中学校だったわけ！？」

「え・・・？違うの？ぼくは・・・そう訊いたよ？」

・・・ダメだ。記憶にねえ。

俺は他人に関心がないっ。全くなって言って良いほどない。

しかも俺が通ってた中学校はハクラスあった。無理だ。同じクラスだった奴でさえ覚えてねえのに、雪城なんか覚えてるわけねえ。・・・雪城なんか言ってすみません。

「・・・とりあえず、分かった。雪城は俺のことが好きなのな。それは分かった。分んねえけど分かったことにした。・・・それでなんでお前がヒステリー起こす必要がある？別に、雪城が俺のこと好きでも嫌いでも関係ないだろ？」

「ない、・・・けど」

「けど・・・？」

「雪城くん、に・・・なーくん、盗られ、ちやう・・・から」  
だれか、尊言語翻訳機持ってきてくれ。

「なんで盗られんだよ？雪城つてもしや裏の顔あたりするのか？  
実は腹黒、とか」

「ち、ちち違うっ！！雪城くん、は、良い人っ！！ぼく、なんかに  
も、気軽に話しかけて、くれる、し・・・」

話が噛み合っていないような気がする・・・。

「ならなんで俺がソイツに盗られるんだよ」

「雪城くん、明るいし、優しい、し・・・可愛いし・・・、人気者  
だし・・・」

「っだあぁーっ！！もうまじで何なんだよっ！？雪城がなんだよ  
っ！！？だからなんだよっっ」

・・・心広くは、無理でした。

「・・・っ雪城くんは性格も外見も人並みに良いっ、・・・そんな  
雪城くんが、なーくんのこと、好きだって・・・言ってるん、だよっ  
？・・・ぼくなんて、勝ち目、ない・・・」

「勝ち目って、お前なあ」

「なーくん、だって・・・ぼくより、雪城くんの方が・・・良いに、  
決まってる」

「・・・っ、勝手に決めつけんなよっ」

ため息がでた。これで本日何回目だ？ああたくっ。  
なんでコイツはこんなにも弱気なんだよ。好きだって言ってる  
うが。

あれ、言ったよな？言ったよな？言っただけ？あ・・・不安  
になってきた。やばいぞ、言っただけ？あ・・・不安  
？俺が言っただけ？あ・・・不安

「好きだ」

「・・・雪城くん、が？」

尊は泣いている。俺を見上げながら泣いている。  
俺は泣きそう。尊を見下ろしながら泣きそう。

好きな奴とすれ違うのって、カナリキツイのな。

「あほ。雪城じゃなくて、お前がだよ」

「・・・」

だれか、翻訳者と呼んできてくれ・・・。  
また溜息がでそう。

「俺は、尊のことが好きだって言っただけだよ！」

これはさすがに通じたよな？通じたはずだよな？てゆーか通じてく  
れ、頼むから。

涙で濡れる尊の頬が、ふいに目についた。  
目について気づく、

尊の頬が（泣いてるせいかもしれないが）、もの凄く紅かったこと  
に。



## ソレの名前（前書き）

どんなに愛しているかを話すことができるのは、すこしも愛してないからである。（ペトラルカの言葉）

## ソレの名前

「ほんと、に？」

本当に、って・・・まてまて。俺ら一応恋人同士だろうが。なんで信じてくれないかなあ、コイツは。

「ばか、信じるよ」

「え、でも・・・どうして？どうして、ぼく、なの？」

その質問、カナリ今更だろ。

「恋に理屈求めんなつ、好きになっちまったもんはしかたねえだろーが」

「・・・う・・・」

未だに尊の頬は紅かった。

てゆうか、さつきよりもっと紅くなってる気がする。

「でも、でも・・・雪城くん、は・・・性格も、外見も、・・・良い、から・・・ふる、なんて・・・勿体無い、気が」

それが恋人の言う言葉かよ。つつか、自分でゆった言葉に顔歪めんなつつうの。

自分も傷つくなら最初っからゆうなよな。たく・・・、

「・・・しゃーねえだろ。俺は雪城じゃなくて、お前が良いんだから」

てゆうか、全然全くこれっぽちも勿体無く感じてないんだが。俺って酷いやつなのな。

「ぼく、で・・・良い、の？」

まだ言うか。

「くどい」

「う、ごめん」

「お前で、じゃなくて・・・お前が、良いんだってば」  
もう半分投げやりになっていた。

正直、俺は今、そうとう疲れてる。なんで話してるだけでこんなに

疲れるかな。

「・・・・・・・・・・ああ、そうか。好きな相手だからか。」

「つつか、お前は俺で良いのか？」

「えっ？」

「俺なんかでまじで良いのか？」

すぐ苛々するし、ため息吐きまくるし、他人のことは超無関心だし、思いやりとかねえし、優しいってわけでもねえし、言葉もキツイ時あるし・・・・、

「・・・なんか言葉にしてみると俺って本当に嫌な奴だな。やべえ凹んだ。・・・おい、尊、こんな男のどこが良いんだよ。」

言葉にださず、目で訊いてみたが尊はこたえなかった。こたえない代わりに俺の目をじっと見つめてる。

暫くして、口をさきに開いたのは、また尊だった。

「・・・なんか、じゃないよ」

「・・・・・・・・？」

「なーくん、は・・・なんか、じゃない」

「・・・・・・・・」

「ぼく、も・・・なーくん、が、良い」

あ、微笑<sup>わら</sup>った。

無邪気な子供みたいに、それでもやっぱり控えめに、尊が微笑った。

「どこ、が、良いかは・・・その、・・・よく、言えないんだけど」  
困ったように眉を寄せながら、また微笑う。

その微笑った顔が可愛いなのって、俺は不覚にも見惚れてしまった。ちきしょう、カナリ溺愛してんじゃねえかつ。

「そんなもん、俺も同じだ」

言えるわけねえ。どこが好きかなんて、言えるわけねえ。

なんてったって、俺は『尊』が好きなんだから。

「あのさ」

「・・・うん？」

小首を傾げる、その動作さえ愛しく思えてしまう俺は、多分末期だろう。

「俺、尊の目・・・すげえ好きだ」

尊が目を見開き、その目に俺を映す。

ただ、それだけのことなのに、なぜか無性に嬉しくなって、俺は無意識のうちに目を細めていた。

麻痺したのか、頭ん中が真っ白になって、尊の顔に自分の顔を近づけて、気付けば尊の驚いたような瞳が目の前にあって、それから、それから、唇には、柔らかいものが触れていて。

あれ、これってナンだっけ。ナンてゆうんだっけ。

やっべ、久々すぎて名前が出てこねえ。えっと・・・えっと・・・、  
「ん、う・・・」

鼻にかかった尊の声が耳に響いた。その声はどういうわけか（もしかしたら頭同様耳も麻痺したのかもしれない）、酷く甘く聞こえた。

ああ、そうだ。これは、

キス、だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3236d/>

---

無意味なことから始めましょう。

2010年10月10日05時57分発行